海野十三全集

第12巻
超人間X号

〔監修〕
小松左京／紀田順一郎

三一書房

海野十三全集
第12巻　超人間X号（第9回配本）

1990年8月15日　第1版第1刷発行　Printed in Japan

監修者　小松左京
　　紀田順一郎
発行者　畠山滋
印刷所　日本写真印刷㈱
製本所　東京美術紙工
発行所　株式会社　三一書房
東京都文京区本郷2—11—3
電話 03(812)　3131～5番
振替東京 9-84160番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　© 1990年
ISBN4-380-90539-X

超人間X号・目次

雪魔(せつま) 5

骸骨館(がいこつかん) 21

霊魂(れいこん)第十号の秘密 31

一坪館(ひとつぼかん) 79

ふしぎ国(くに)探検 113

金属人間 183

恐竜島(きょうりゅうとう) 273

奇賊(きぞく)は支払う――烏啼天駆(うていてんく)シリーズ・1――391
心臓盗難――烏啼天駆シリーズ・2――401
奇賊悲願(ひがん)――烏啼天駆シリーズ・3――415
暗号の役割――烏啼天駆シリーズ・4――427
すり替(か)え怪画(かいが)――烏啼天駆シリーズ・5――443
超人間(ちょうにんげん)X号 459
解題〔池田憲章〕 561

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

超人間X号――海野十三全集・第12巻――

雪魔（せつま）

東京の学校が休みになったので、彦太少年は三月ぶりに木谷村へ帰って来た。村はすっかり雪の中にうずまっていた。この冬は雪がたいへん多くて、もう四回も雪下ろしをしたそうである。駅をおりると、靴をかんじきにはきかえて村まで歩いたが、電柱が雪の中からほんのわずかに黒い頭を出しているばかりで、屋根の見える家は一軒もなかった。

「この冬は、これからまだ三度や四度は、雪下ろしをせねばなるまいよ」

と、迎えに来てくれた父親はそういって、またちらちらと粉雪を落しはじめた灰色の空を恨めしげに見上げた。

「五助ちゃんは何している？　ねえ、お父さん」

彦太は、仲よしの五助のことを尋ねた。

「ああ五助ちゃんか。五助ちゃんは元気らしいが、此頃ちっとも家へ遊びに来ないよ」

「ふうん。僕が居ないからだろう」

「それもあるだろうがな、しかし噂に聞けば、五助ちゃんたちは三日にあげず山登りに忙しいそうだ」

「山登りって、どの山へ登るの。こんなに雪が降っているのに……」

「さあ、それはお父さんも知らないがね。とにかくあの家の者は変っているよ。今につまらん目にでもあわなきゃいいが……」

「つまらん目って、何のこと」

彦太は振返って後から来る父親の顔を見上げた。しかし父親は、ちょっと呻っただけで、それにはこたえなかった。

その翌朝、彦太はもうじっとしていられなくて、先のとがった雪帽を肩のところまで被り、かんじきの紐をしめると、家をとびだした。雁木道がつきると、雪穴をのぼって、往来へ出た。風を交えた粉雪が横から彦太の身体を包んでしまった。五助の家まで、まだ五丁ほどあった。

五助は家にいた。そしておどりあがって彦太を迎えた。

火炉のむしろに腰をかけて、仲よしの二人は久しぶりに向きあった。東京から買って来たお土産の分度器と巻尺が五助をたいへんよろこばせた。

「五助ちゃんは三日にあげず山へ行くってね。どの山へ行くんだい」

彦太は、聞きたいと思っていたことを、すぐに尋ねた。

「うん」

五助は簡単な返事をしただけで、しばらく口をつぐんでいたが、やがて、

「誰にそんなことを聞いたの」
と、ちょっとかたい目付で逆に尋ねた。
そこで彦太は、「それはお父さんが村の誰かから聞いたことさ」といった。すると五助はかるくため息をついて、
「やっぱりもう知れわたっているんだな。だから僕は、こんなことをかくしておいても駄目だと、はじめにいったんだけれどね」
「五助ちゃん。何か悪いことをやっているのかい」
彦太は、心配になるものだから、遠慮なく聞いた。すると五助は目を丸くして、首を左右に振った。
「彦くんのことだから、何もかくさないで話をするけれどね、実は一造兄さんが久しく山の中にこもっているんだ」
「へえ、そうかい」
「一造兄さんは、雪の中に大きな穴を掘ってその中にこもっているんだ。そして休みなしにカンソクをしているんだよ」
「カンソク？　それは何のこと」
「僕もよく知らないけれどね、器械をたくさん持ちこんでね、地面の温度をはかったり、地面をつたわって来る地震を、へんな缶の胴中へ書かせたりしているのさ。これは春までつづけるんだって」
彦太は、それが何のことやら分らなかった。しかし一造兄さんといえば、東京の何とか大学の大学院学生で、いつもこんな科学実験をやっている人だった。だからそういうことがかくべつ悪いことであるはずがないと安心した。
「じゃあ研究のために観測しているんだろう。それなら悪いことじゃないから、村の人たちにかくさなくてもいいじゃないか」
「しかしね、一造兄さんはこのことは黙って居れときびしく命令を出しているんだよ。で、僕達が三日毎に山登りをして、兄さんの食物なんかはこぶことさえ誰にも知られないようにしろというんだよ」
「ああ、それで五助ちゃんは三日にあげず山登りをするんだね。なんだそんなことか。ははは」と彦太少年は安心して笑った。「でも、そんなことを秘密にするということは、ちょっとへんだね」
彦太がそういうと、五助は無口でいろりにそだをさかんにさし入れるのだった。五助の顔には、まだ何か語りつくさないものがあると書いてあるようであった。
（何だろう？）
と彦太は、ふしんに思った。いつもの五助なら、立板に水を流すようにどんどんおしゃべりをするのに、それをしないで、何かを小さい胸に包んでいるようなのは、なぜだろうか。あ、そうか。ひょっとすると、その山が

どこかというのが秘密なのではあるまいか。そしてその山からは、やがて尊い鉱脈でも発見される見込みがあるのではなかろうか。

そう考えた彦太は、また遠慮なしに、そのことを五助にいった。すると五助は、一言のもとに打消した。

「ちがうさ。うちの兄さんは、そんな欲ばりじゃないよ」

「じゃあ、どこの山。山の名を聞かせてくれたっていいだろう」

彦太は五助を追いつめた。五助は見るもかわいそうなほど悩みの色をうかべていたが、やがて決心したものと見え、立上って彦太の傍へ席をうつした。そしてあたりを見まわした上で、彦太の耳の近くで低い声を出した。

「誰にもいっちゃいけないよ。そして君もおどろいてはいけないよ」

「誰がそんな秘密をもらすものかい。もちろん、おどろきやしないよ」

「さ、どうかなあ。で、その山というのはね、あの青髪山なのさ」

「えっ、青髪山！　あの、誰も近づいちゃいけないという……」

「大きな声を出すなよ」

ふーんと彦太は呻った。彼の顔色は、とたんに青ざめていた。青髪山か。青髪山ならたいへんである。青髪山には昔から魔神がすんでいるという話で、そこへ入った者は無事に里へもどれないそうだ。猟師だって、どんないい獲物を追っていても、その青髪山には近づきはしない。

そのような怪山の雪の下に穴を掘って観測を始めた一造兄さんが、誰にも語るなと命令したのはもっともだ。しかし一造さんは勇気がある。それはともかくあの奥深い青髪山まで、丈余の雪を踏んで三日ごとに兄のため食物をはこぶ友の身の上を考えると、気の毒でならなかった。

そのとき五助は、さらに彦太の方へすり寄っていった。

「実はね、一造兄さんはね、この冬こそ、青髪山の魔神の正体をつきとめてくれると、はりきっているんだよ」

「魔神の正体をだって。しかしそんな器械で魔神の正体が分るだろうか。第一、あの山に魔神がすんでいるなどというのは伝説なんだろう。誰もほんとうに見た者はないんだから……」

彦太がそういうと、何思ったか五助は友の腕をしっかりつかみ、耳に口をあてた。

「ところがね、彦くん、魔神は実際あの山に居るんだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「うそだよ、そんなこと」
「だって……だって見たんだよ、この僕が！」
「ええっ、君が魔神を見たって……」
彦太はそれを聞くと頭がふらふらした。

魔神の山

五助と彦太とは、身をかためて、粉雪のちらちら落ちる戸外へ出た。頭には雪帽を、身体には簑を、脚には長い雪ぐつをはき、かんじきをつけた。そして二人の背中には、食料品と燃料と水と酒とが、しっかりくくりつけられた。青髪山の雪穴の底で、観測をつづけている一造へとどける生活物資だった。
「彦くん、やっぱり君は行かない方がいいよ。お雪を連れていけばいいんだから」
お雪というのは五助の妹だった。いつもは五助とお雪の二人で青髪山へ登るのであった。
「いいよ、いいよ。今日は僕が手伝う」
彦太は、いくら兄のためとはいいながら、自分よりも年下の女の子があの恐しい青髪山へ登るのを、黙って見物しているわけにいかなかった。ことに今日は吹雪になるらしい天候で、お雪が行けばどんなに苦労するかしれないと思うと、だんぜん彦太は自分が身代りになることを申出たのだった。
お雪は、雪の往来まで送ってきた。はずかしそうにうつむき勝ちだったが、彦太にたいへん感謝しているのがよく分った。
五助が先に立ち、その後に彦太がつづき、雪の道をいよいよ歩きだした。幸いに人の目にもふれず、うまく青髪山への遠い山道の方へ曲ることができた。粉雪は、だんだん量を増して、二人の少年の姿を包んでいった。五助のかんじきが、三歩に一歩は深く雪の中にもぐった。
「三日前に来たときよりも、二尺ぐらい雪が増したね」
五助が、そういった。
「疲れたら、僕が代って、前を歩くよ」
「なあに彦くん、大丈夫だ」
深い雪の山道の傾斜がひどくなった上に、重い荷を背負っているから歩行がたいへん困難になった。二人の少年は、もう、ものもいわず、あらい息をはきながら雪の道をのぼって行く。
彦太の方は割合に楽であった。五助の後からついて行けばいいのだ。五助が踏みかためてくれた、かんじきの跡を踏みはずさなければいいのだった。
彼は歩きながら、さっき五助から聞いた青髪山の魔神

を見た話を頭の中に復習した。

五助は、この前の登山のとき、その魔神を森の中にたしかに見たそうである。その森は、それから二十丁も奥にある杉の森で、地蔵様が立って居られるところから地蔵の森といわれているところだ。

ちょうど行きの道だったが、五助が前方約二百メートルに、この森を見たとき、雪の中に高い幹を黒く見せている杉の木立の間を、何か青味がかったものが、煙のようにゆらいでいるのをみとめたのだった。

（誰か、あんなところで焚火をしている？）

と、始めは思ったそうだが、それにしても焚火にしてはおかしい。煙にしては色が青すぎるし、そして雪の降り積っている、下の方には見えず、杉の梢に近いところを、まるで広い帯が宙を飛んでいるように見えたので、はっと胸をつかれた。五助はあやうく声を出そうとして、ようやくそれを停めた。後には妹のお雪がついてくるので、ここでへんな声などをあげようものなら、お雪はおそろしさのあまり、気絶してしまうかもしれないと思ったからである。

五助は気をしずめようと、一生けんめいつとめながら、なおも怪しい青いものの姿を見つづけた。するとその怪しいものは、急に杉の幹を伝わって下りたように見え、雪の上を匐って道の方へ出てくると見えたが、その瞬間、ぶるっと慄えたかと思うと、かき消すように、その姿は消えうせたという。

五助はそこでもう道を引返そうと思ったが、兄が待っていることを思い、また妹をおどろかせることを心配して、自分の気を引立てると、そのまま、歩行をつづけたそうである。

が、やがて恐ろしい関門にさしかかった。その地蔵の森の前を、どうしても通りぬけねばならないのだった。五助はいざというときは、その怪物と組打をする決心をし、他方どうかその怪物が出てくれないように祈りながら、森の前にさしかかった。

幸いに、怪物の姿はどこにも見あたらなかったし、呻り声も聞えなかった。ただ見つけたものは、雪の中に凹んだ足跡らしいものが、点々としてついていたことだった。その足跡らしいものは、もちろん人の足跡ともちがい、また動物のそれでもなく、舟の形をして縦に長く、そしてまわりからゆるやかに、中心へ向けて凹んでいたのである。森の前を通り抜けるとき見たのはそれだけだった。

五助は、そこを抜けると、お雪をはげまして、急に足を早めた。一刻も早く、その気味のわるい森から遠ざかりたいためだった。何もしらぬお雪は、五助の早足を恨みながら、息を切らしてついてきたという。

それからまた一里ばかり山を入って、兄一造のこもっている雪穴についた。五助はあのことを早く兄に話をしたく思ったが、妹がいるのでそれをいいかねた。帰りぎわになってやっとその機会が来た。一旦道へ出た五助は、忘れものをしたように装いながら、雪穴へ引返して、兄にその魔神を見た話をしたのだ。

一造はその魔神の話を一笑に附した。第一地蔵の森は、青髪山よりずっと下にあること、またその足跡と見えたのは、雪を吹きつけた風の悪戯であること、それから雪の中では眼が変になって、よくそうした青いものを見ることがあることなどをあげて、それは青髪山の魔神ではないと結論したのだった。せっかくの一造の説明も五助の疑惑をすっかり払うほどの力はなかった。——まあ、こういう話だった。

「彦くん。いよいよ来たよ。地蔵の森だ」

五助が叫んだ。

「ああ、地蔵の森か。魔神は見えるかい」

「いや、今日は出ていないや」

雪はやんでいた。見とおしはよかった。地蔵の森の木立も、硝子にとおしたように、はっきり見えていた。なるほど、五助のいう魔神らしき怪しい影は何も見えなかった。

「今日は足跡もついてないや」

五助は、森の前を通り抜けるときに、そういった。彦太は笑った。しかし五助は笑わなかった。

それから一里の苦しい雪の山道が始まった。折悪しく急に風がかわって、粉雪が渦をまいて落ちだした。いよいよ吹雪になるらしい。二人の少年は、道の真中に立ちどまって、魔法壜からあつい茶をくんで呑み、元気をつけた。それからまた雪道へ踏み出した。

二時間あまりの苦しい登山がつづいた。二人の少年は、全身汗にまみれ、焼けつくような熱さを感じた。

「五助ちゃん。まだ兄さんの雪穴までは遠いのかい」

彦太は、雪になれていないので、ややへばったらしい声を出した。

「もうすぐだ。あそこに峯が見えているだろう。あの裏側だから、そこの山峡を過ぎると、観測所の雪穴が見え出すよ」

彦太は返事の代りに、重い首を振った。

そのときであった。とつぜん四、五発の銃声が聞えた。どどん、どんどんと、はげしく雪山に響いた。音のしたのは、どうやら峯のあたりである。

「銃声だ。どうしたんだろう」

「何かあったんだ。しかし誰が撃ったんだろう」

「早く行ってみよう。兄さんの雪穴へ……」

二少年は顔色をかえ、雪をかくようにして前へ急い

だ。

雪崩(なだれ)だ！

「兄さーん。どうしたんです」
「一造兄さん。今行きますよゥ」
五助と彦太は、かわるがわる叫びながら、一秒でも早く一造のいるところへ近づこうと、一生けんめいに走った。
観測所のあるところへは、山をぐるっと、一まわりしなければならない。二少年は気が気でないが、雪に足をとられて、思うように足がはかどらない。
それでもやっとのことで、一造の籠(こも)っている雪穴の入口までたどりついたが、そのときはもう銃声が聞えてから二十分もたった後であった。
「兄さん、兄さん」
「どうしたんですか、さっきの銃声は……」
二少年は、そう叫びながら、身体についた雪をも払わないで、雪穴の中へとびこんだ。
「おや。兄さんは見えないぞ」
五助は、観測室の中できょろきょろ。
「じゃあ、外へ出たんだろうか」
彦太はすぐ穴から外へとび出した。そして、あたりの雪の上に目を走らせた。
「分ったかい」
五助が穴から出て来た。
「いや、分らない。でも、ほら、雪の上には僕たちの足跡の外(ほか)に誰の足跡もついていないよ。すると兄さんは外へ出ないわけだ。やっぱり穴の中だよ」
「そうかしらん。しかしへんだね。穴の中には、たしかにいないんだがね」
二少年はもう一度、穴の中に入った。そして、しきりに一造を呼んでみたが、やっぱりその返事は聞かれなかった。
「おかしいねえ、あかりがいつもついているんだが、今日は消えていらあ」
「そうだ、暗くて分りゃしない。あかりを早くおつけよ」
「どこだったかなあ、電池のあるところは……」
五助は奥の方へいって、手さぐりでそこらをなでまわしていたが、とつぜんおどろきの声をあげた。
「ああ、たいへんだ。電池がひっくりかえっている。……おや、いつの間に掘ったんだろう。穴の奥が深くなっているぞ」

と、そのときである。どこからともなく、ごうッという音が聞え始めた。すると雪穴の外にいた彦太がとびこんできた。
「五助ちゃん。早く外へ出ないとあぶない。雪崩がやって来たぞ」
「えっ、雪崩。それはたいへんだ」
「早く、早く……」
二少年はころがるようにして雪穴の外へ出た。ぱらぱらと、雪のつぶてが降って来た。
「向こうへ逃げよう。彦くん、早く……」
五助は先に立って、反対の山の斜面へ、兎のようにかけのぼっていった。
二少年の背後に、すさまじい響が起ったが、それをふりかえる余裕もなく、二人はなおも一生けんめいに斜面をはいのぼった。息が切れる。心臓が破裂しそうだ。
響が小さくなったとき、二少年は始めて生命を拾ったことを知って安心した。二人とも雪の中にぶったおれて、しばらくは起上る元気もなかった。
やがて二人が元気をとりもどして雪の上にむっくり起上ったとき、雪はもうやんでいて、あたりは明るさを増していた。そして二人の目にうつったものは、ものすごい雪崩のあとであった。さっきまで二人が走っていたところは、もうすっかり雪の下になっていた。観測所のあった雪穴なんか、もうはるかの底になってしまった。
「ああ、こわかったねえ」
「もう死ぬかと思ったよ。兄さんはどうしたかしらん」
「さあ、困ったねえ」
とうとう一造の所在をたしかめないうちに、このとおり雪崩になってしまったのだ。一造の生死のほどが一層心配になってきた。彦太は何とかして五助を安心させたいと思ったけれど、そんな材料はなんにも見あたらなかった。だが一つ、そのとき気がついたことがある。
「五助ちゃん。今ごろ雪崩が起るというのはへんだね。まだ早すぎるじゃないか」
「そうなんだ」と五助はうなずいた。
「しかしさっきの銃をうったあの響で、雪崩が起ったのかもしれない」
「そんなことがあるもんかなあ」
「たまにはあるんだよ。しかし、どっちかといえば、めずらしい出来事だ」
五助の語るのを聞いていた彦太はそのとき五助の手首に赤く血がついているのを見つけて、おどろきの目をみはった。
「五助ちゃん、怪我をしているじゃないか。手から血が出ているぜ」
「えっ、手から血が出ているって……」

五助もおどろいて、急いで自分の両手を見た。なるほど手首のところに、いっぱい血がついている。
「どこから出血したのだろう。別に痛みも感じないのにねえ」
よく調べてみたが、ふしぎにも、どこにも傷口が見つからない。
「どこにも、怪我はないんだがねえ」
「でもへんだね。ちゃんと血がついているんだからね。ずいぶんたくさんの血だよ」
彦太も、ともども調べてやったが、たしかに五助はどこにも傷をうけていないことが分った。
「ふしぎだねえ。どうしたんだろう」
「全くふしぎだ。気味が悪いねえ」
「ああ分った」
「分ったって。どういうわけなの」
「そのわけは……困ったねえ」と彦太は困った顔をしながら「でも五助ちゃん、悲観しちゃだめだよ。つまりあの雪穴の中に血が流れていたんじゃないか。その血が君の手についたのかもしれない」
「あっ、そうか」五助は、そういって、さっと顔色をかえた。「すると一造兄さんが穴の中で……」
「さあ、それはまだほんとうかどうか分らないんだ。雪穴を掘りだした上でないと、確かにそうだといえないよ。だから気を落すのはまだ早いよ」
彦太は五助を一生けんめい、なぐさめたが、心の中では、これはたいへんなことになったぞ、と思った。
「五助ちゃん。山を下りよう。そしてこのことを皆に知らせようや」
「そうだ。村の人にそういって、雪崩の下から雪穴を早く掘りだして見なければ……」
五助と彦太とは、雪の中に幾度もころびながら、大急ぎで山を下りた。
すこし早すぎる雪崩のこと、一造の行方不明のこと、五助の手首についていた血のこと――二人が知らせた変事は、すぐ村中にひろがった。すぐさま救援隊がつくられ、一同は青髪山の現場へかけつけ、そこで雪掘りが始まった。
果して雪崩の下から、どんな怪しい事が掘りだされるだろうか。

雪とけて

変事を知ってかけつけた村人たちは、雪の中に一生けんめいに雪崩(なだれ)のあとを掘りかえした。しかし仕事は思う

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com